

内外交差点

「贅沢品」から「必需品」の道の途中 高齢者優待パスに見る潜在需要

森田 玲子氏（姫路タクシー社長） 第9/12回

Merry Christmas。11月22日は「良い夫婦の日」。この日に姫路駅と姫路城を繋ぐ大手前道路でイルミネーションの点灯式があった。昨年照明デザイナーの石井幹子さんの監修で姫路城のライトアップは様変わりした。光でここまで石垣や城の表情が変わるのかと感嘆している。

姫路市はこのイベントに大きな予算を割いているが、目的としては「夜の観光資源として」ということともう一つ「この光の下で若いカップルが語り、恋をして結婚して姫路で暮らしてほしい」という市長の強い思いがある。少子化時代の現在、日本のほとんどの市町村はいかに若者、とりわけ女性が土地に定着してくれるかを多くの政策の根底に据えている。姫路市では今年度から高校生までの医療費無償化も始まり、ますます現役世代への政策が充実してきたが、その一方で確実に、そして急速に高齢化は進んでいる。タクシーはこうした現状に最も機動力をもって寄与できる手段であると自信を持って言える事例をお話したい。

姫路タクシーからすぐ近くにHタクシーさんがあり、お互いお得意様の注文に車両が足りない時は助け合うような良い関係にある。Hタクシーさんは地元運送会社の系列で、管理者は本社から異動されてくる。2012年当時の管理者であるS氏は仕事を始めたばかりの私に多くのことを教示してくれた恩人だ。彼は仕事の傍ら、障がい者団体の理事も務めるような福祉に対しても情熱を持った人であった。そしてそれは高齢者に対しても同様であった。

彼はある政策に不満を持っていた。それは姫路市の行う75歳以上の高齢者優待パスについてである。当時、その対象はJRと山陽電車、神姫バスとフェリーでタクシーが選択肢の中になかったからだ。S氏は「タクシーほど高齢者の生活に必要なものはないのに、選択肢にないのはおかしい」と強く訴えられていた。彼は私に「僕はサラリーマンだから数年後にはこの業界から去る人間だ。でも森田さんはそうではない、どうしてもこの僕の意志を繋げていってほしい」ということを何度も言われた。私自身もタクシーだけが無いのはおかしいし、是非

選択肢の中に入りたい気持ちは持っていた。

二人で何度も高齢者支援課へ出向いてタクシーの必要性を話した。その時の断り文句は「タクシーは贅沢品

ですから」という一文であった。まさにこの一点張り。壁は高かった。確かにタクシーはバスや電車より高い料金ではあるが、その便利さは比較にならない。50メートルの移動にタクシーを必要とされる高齢年金生活者は現実にいるという事を何度も説明した。

その突破口が開けたのは2015年。要介護3以上という条件はあったが、高齢者優待パスの選択肢にタクシーが仲間入りを果たした。この時のタクシー希望者は186人である。僅かな人数であるが、タクシーが公共交通として認められた第一歩のような気がして本当に嬉しかった。そして2020年には条件が要介護2以上に緩和される。これは利用者からの要望が大きかったようで、その理由に要介護認定が厳しくなった事と、要介護3レベルでは一人での外出が困難でタクシー利用も難しいという事が挙げられる。

そしてこの3月、10月から介護要件は撤廃され全ての75歳以上の姫路市民に年間7000円分のタクシー券の選択肢が与えられるとの知らせが関係者から入った。私はすぐさま退職して久しいS氏に電話を入れて喜びを分かち合った。9年前に186人で始まった制度が今年度のタクシー選択者は3万2715人である。75歳以上の該当者が8万3000人余りであるから一気に45%の方がタクシーを選択したことになる。これが何を意味するか。これ程タクシーを利用したいと思っている人がいたということであろう。実際運用が始まってから、初めてタクシーを使うという方がかなり増えている。後期高齢者になってから新しい交通手段を取り入れることはチャレンジングだと思うが、それが尚更素晴らしいと思う。

S氏はこの吉報をしみじみ喜んでくれた。彼は今、かつて関わっていた障がい者団体の中心的な役割を担っている。当時彼は、タクシーが如何に福祉的な側面を担える交通手段であるかを説いてくれた。単に売上を高くすることだけではない、如何にタクシーで社会貢献できるかを考えることがタクシー事業者の役割であると考えたきっかけを下さった。「贅沢品」と一刀両断されていたタクシーが、「必需品」として高齢者のおでかけの手段となる道のりの今は途中である。

